

---

# HAPPY TRAIN

橘 潤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H A P P Y   T R A I N

### 【Nコード】

N 7 4 0 5 R

### 【作者名】

橘   潤

### 【あらすじ】

ハッピーエンドの話だけを載せます。

各話読みきり方式です。

たまに二、三部で構成されているのも載せます。

## 濃霧（前書き）

はいはい

皆さん、はじめまして

私は作者ではないですよ

作者の名前は橘潤。  
たちはなじゅん

私は彼の書いたハッピーエンドの話を紹介する語り手のような存在です。

あ、名前あると思いました？

考えてくれてないんですよ。

なんか、名前無くてもよくね？とか言い出して…もちろん、次回までには考えておくように言いましたが、念のためここで募集させていただきます。

気に入った名前があれば使わせてもらいますね

ちなみに、一話で終わるものもあれば数十話続く話もあるかもしれません。

そこはハッキリしてないですよねえ…うちの馬鹿作者は……

まあ、長い話はこの辺で終りにしときましようか。  
では、本編をどうぞ

## 濃霧

いつからだろうか。

いつからここに霧が立ち込むようになったんだろう。

いつからこんなに、霧が濃くなっただろう。

思い出せそうに思い出せない。

光を求めても、光は入ってこない。

日が経つに連れ、霧はどんどん濃くなっていく。

霧という檻は、俺を絶対に逃がしてくれない。

霧という檻は、俺一人では決して壊せない。

だから俺は求める。人との関わりを…

だけど、人と関われば更に霧は濃くなる。

この霧は俺を逃がさないためだけじゃない。

誰も俺に、近づかないようにしているんだ……

それでも俺は求める。

ここから連れ出してくれる人を…

誰か…俺をここから連れ出してくれ………

雲一つない青い空。

とてもいい天気だ。

でも、俺の心はスッキリしない。

雨の日に比べればましだけど…

「銀次、カラオケ行こうぜ！」

友人の広軌が声をかけてきた。

「別にいいけど…」

「お前…どんどん暗くなつてくよなあ」

そんな事言われても、俺にはどうしようもない。

「何か悩みでもあるの？」

「え…っと…誰？」

急に話しかけてきたのは名前も知らない、長い黒髪をポニーテールにしている女の子。

「お前、もう二ヶ月も一緒にクラスなんだから名前くらい覚えろよ」

「無理…」

「私は河野沙希（かわの さき）。よろしくね」

「あまり俺に関わらない方がいいよ…」

「え？」

俺に関わらない方がいい…傷つけてしまうから……  
だけど河野は悪戯っ子のような笑みを浮かべて……

「やだ。私が関わりたいから関わる。それじゃダメ？」

なんて言ってきた。

それなら俺は構わない。

傷ついても責任は取らない。否、取れない。

「銀次とカラオケ行くけど、河野も来る？」

「行く！」

「銀次もいいか？」

「ああ…」

何でだろ…二人といると霧が晴れてく。

「ねえ…さりげなくさっきの質問を流されてる気がするんだけど…」

「……」  
「悩みがないって言えば嘘になるけど……今はそれ以上言うつもりはない……」

「わかった。いつでもいいから、言えるようになったら教えてね。相談に乗るから」

「うん…」

その後は二人とカラオケ行った。

俺はいつもと同じであり歌わなかった。

また、あの夢だ……

濃い霧が立ち込めている森の中を一人歩き続ける。

ただ、いつもと違うのは…僅かに光が差し込んでいる事…

そして、霧の先に見える二つの人影。

それが誰なのか気になって走って追いかけるけど、距離が全く縮まらない。

立ち止まって息を整えていると、どこからか声を掛けられた。

どうして霧がこんなに立ち込めてるかわかる？

わからないから困ってんだろ。

そっいうお前は何か知ってんのかよ…

知ってるよ。だって僕は…

俺だって言うんだろ。

わかってるじゃん

声が昔の俺にそっくりだからな。  
それより、この霧の事知ってんだったら教えろよ。

悪いけど…それはできない。これは君一人で何とかしなきゃならないから……

そうか…  
そろそろ時間だな。  
変だよな。夢のはずなのに、自分の意思で会話できてるって。しかも、自分と。

そうだね。もう、僕と君は会うことも無いだろう。君の心は良い方向へ変わっていったから

朝六時。

早く目が覚めすぎたけど、寝る気にもなれない。  
制服に着替えながら夢の事を思い出す。

夢とは思えないほど、鮮明に記憶している。

一階のリビングに向かう。

両親は海外旅行で三年間一度も帰ってきてない。

否、帰ってきてはいる。国には。

帰ってきてても家に寄らない。

二年前から一切連絡は取らなくなったから今は知らないけど……

まず、三年間も仕事しないで暮らせるわけがない。

何かしらの仕事はしているはず。

息子の俺にすら言えないような仕事を。

思考をリセットし、朝食を食べて学校に向かう。

「つはよー！銀次。相変わらず朝はえゝなあ」

「そう言う広軌は珍しく早起きじゃねえか」

「たまには早く起きることもあるさ」

「それもそうだな」

俺が軽く笑うと広軌が珍しいものでも見たような表情で俺の事を  
見ていた。

「お前の笑った顔、めっちゃ久しぶりに見た」

「俺がいつももの凄く暗いとも言っような言葉だな」

「実際暗いじゃん」

軽く傷ついた。

そんなハッキリ言わなくても……

「広軌くん、銀二くん、お早う」

「おはよう、河野」

「っはよお」

河野って朝早いんだな。

「ああ、そうだ。河野」

「何？」

「悩んでた事だけど、すぐに解決しそうだ」

「そうなの？良かったね。で、理由は何だったの？」

「理由は…」

俺は夢で見る霧の事を話した。

その霧ができる理由も今さっきわかった。

俺は恐れていた。

傷つく事を…

誰かを傷つける事を……

それが自分でも気付かないうちに壁を、檻を作っていたんだ。  
誰にも壊せない壁。

自分を守る檻。

でも、今はそれが壊れかけてる。

たった二人の友達のおかげで…

後は、自分が一歩踏み出せばいい。

たった一歩踏み出すだけで、世界は変わる。

二人との出会いで、それを知った。

「ほら、急がねえと遅刻するぞ」

今、止まっていた俺の心は動き出した。

霧が晴れた先にあるのは希望だと信じて……

}  
E  
N  
D  
}

## 濃霧（後書き）

皆さん、いかがでしたか？

楽しんでいただけたのなら嬉しいです。

では、また次回～

感想、お待ちしております

## 人形（前書き）

皆さん、おはよう、こんにちは、こんばんは、  
早速私の名前が決まりました！  
イエーイ。

結局作者が前回の話を投稿してすぐに思いついたらしいです。

名前：藍那<sup>あいな</sup>

性別：女

年齢：19歳

身長：156cm

体重：言っちゃダメー！！

髪：腰まである茶髪

瞳の色：青

体重まで発表しようとするってどういうことですか！！  
と、とにかく本編始めます！

## 人形

彼は人形だった。

来るものも去るものも拒まない。

彼の周りにはいつも人が集まる。

それでも、いつも独りだった。

否、だからこそ、独りだったのかもしれない。

彼はいつも心を見せない。

笑っても、それは心からのものではない。

彼は人が自分の傍に集まらなければ静かだ。

自分から話しかける事はない。

彼は同じような日々を繰り返していた。

まるで、誰かに決められた事を逆らわないで行う人形。

誰かにお願いされれば嫌だと言う事無くやる。

それが掃除を代わりにしてだとか小さな事から、お金に関する事でも…

そんな彼はいつも、何かに怯えている。

それは周りの人間に対してじゃなく、別の何か…

だから私は、彼が気になるのかもしれない。

そんな彼を守ってあげたくて、私は彼に声を掛けたのかもしれない。

「ねえ、一緒に帰ろ」

「いいよ」

これだけじゃ他の人と同じ。

だからもう一言、言わなければならぬ。

「嫌だったら、断ってもいいんだよ」

「別に嫌じゃない」

「本当？」

「ああ」

どうやらこれは嘘じゃないらしい。

私は一つ、彼と約束する事にした。

「ねえ、お金の貸し借りだけはしないって、約束できる？」

「ああ」

「約束だよ」

「そんなに信用できないなら、何か条件でもつけるか？」

「うん。それじゃあ、破ったら言う事を一つ、必ず聞くってのはどう？」

「いいよ」

これでもし、お金の貸し借りをしても私の目的は達成できる。  
簡単な用で難しい事。

翌日、彼はお金を貸してと言ってきた人に対して、お金の貸し借りをしないって約束してるから無理。と、言った。

私の事を言うかと思っただけと言わなかった。

次の日も…その次の日も、彼は約束を守った。

みんなは彼がお願いをすれば何でもしてくれると思っている。

でも、それは違う。

彼はお願いよりも約束を優先する性格だった。

私はいつも、彼と一緒に帰った。

一月もすれば、彼と帰りにカラオケに行ったりゲーセンに行ったりブリクラを取ったり、遊ぶようになった。

そうして時は流れ、彼は少しずつ、心を開いてくれた。

それは他の人と一緒にいる時に見せる表面上のものではなくて、心からのものだった。

ある日、私は彼に、とある公園に呼び出された。

彼から話を持ちかける事はめったにないから少し楽しみ。

私が公園に行った時にはすでに彼がいた。

私が声を掛けると、彼は真剣な表情でこっちを見た。

その表情に、どんどん鼓動が早くなっていく。

やっと気付いた。

私は彼の事が好きだから、気になってたんだ。

それは友達とか憧れじゃない。

恋愛感情。恋人としての、カレカノとしての好き。

彼の口がゆつくりと開かれる。

鼓動はさっきよりも早くなっていく。

期待に胸が膨らむ。

「俺と付き合ってください」

私は頷いた。

嬉しかった。

とても、嬉しかった。

その日、彼は完全に人形じゃなくなっていた。

いつも何かに怯えていた瞳は、スッキリとしているようだった。

もう一つ、私は気付いた事がある。

それは、私も彼と同じで、人形のように過ごしていたと。

## 人形（後書き）

あれ？

これってかなり暗い話じゃない？

と思った人は言ってください。

作者に消すように言っんで。

さて、作者とお話しないと…

では、また次回！

絆（つながり）（前書き）

皆さん、お早う、こんにちは、こんばんは。

うちの作者、珍しく三日連続投稿してる。

私の出番があるから嬉しいな

では、本編をどうぞ

## 絆（つながり）

私は世界が好き。

大切な人のいる世界が。

俺は世界が嫌いだ。

大切な人を奪う世界が。

私は人が好き。

友達がどんどん増えていくから…だから嫌いにならない。

俺は人が嫌いだ。

もう二度と、大切な人を失いたくないから…だから、好きにならない。

私は歌が好き。

詩にはちゃんとストーリーがあつて、音楽がそれを鮮明にイメージさせてくれる。

俺も歌が好きだ。

ヘッドホンで音楽を聞いていると、周りの音が聴こえなくなるから。

私は光が好き。

私を優しく包み込んで、暖めてくれるから。

俺は闇が好きだ。

俺と言う存在を飲み込んでくれるから。

全く違う二人の思考。

なのに、二人はいつも一緒にいる。

少年がいくら避けても、少女は追いかける。

少年は絆つながりを持っていた。

その絆つながりが理不尽な世界の所為で断ち切られ、孤独になった。

少女は孤独を知っていた。

孤独と言う辛さに耐えられなくなり、絆つながりを求めた。

今の二人には絆つながりはない。

自ら絆つながりを断ち切る者と、本当の絆つながりが見つからない者。

そんな二人の間に、小さな絆つながりが生まれ始めている。

恋と言う名の絆つながりが……………

絆（つながり）（後書き）

相変わらず暗いのか明るいのか分からない話ですよねえ（苦笑）

でも、一応ハッピーエンドだからなあ…

感想、お待ちしています

## 記憶（前書き）

皆さん。おはよう、こんにちは、こんばんは、  
藍那です。

二日開いてしまいましたねえ。

作者はこれでも頑張っているそうです。

今回の本編はハッピーエンドですけど暗いと思います。  
これは作者にも微妙なようです。

今回は後書きはないです。

## 記憶

彼は記憶がなかった。

直前に精神的なもので、肉体的なもので、強いショックを受けたわけではない。

自室のベッドで目を覚ました時には記憶を失くしていた。

私はいつものように彼を迎えに來ただけだけど、彼の母親にその事を聞いてすぐに部屋に駆け込んだ。

「か…お、り……？」

ベッドから体を起こしている彼は、確かに私の名前を呼んだ。記憶喪失と聞いていたのに、私の名前を知ってる。

親にも頼んで私を騙したんじゃないだろうか、思った。

「春人…<sup>はるひ</sup>私のこと覚えてるの？」

念のために聞いてみた。でも、帰ってきた答えは望んだものじゃなかった。

「何でだろう？君の事は知らないはずなのに……」

嘘であつて欲しかった。いつもみたいに冗談だよつて言つて欲しかった。

「でも…何だかとても落ち着く。君はさっきの母親と違つて、とても特別な存在みたい」

とても優しい笑顔。落ち込んでるときにいつも励ましてくれた、

私の大好きな、春人の笑顔。

「ねえ、僕について君の知ってる事を教えてくれないかな？」

私は自分の知ってる春人のかっこいいところ、かわいいところ、意地悪な性格や、そんな春人が好きって言った。

勢いで告白しちゃったけど気にしない。私は正直な気持ちを伝えただけ。

「香織」

「な…っ!？」

彼に名前を呼ばれて顔を向けた口が何かに塞がれた。目の前にあるのは彼の顔。塞いでいるのは彼の唇。ゆっくりと、彼の顔が離れていく。

「僕も香織の事が好きだよ」

彼からの告白。記憶を失っているんじゃないの……

「何故か君の話を聞いていると、いろんな事が頭に流れ込んでくるんだ。それは全て、君との思い出」

「それじゃあ、記憶喪失ってことに変わりはないの？」

「うん。覚えているのは自分の名前。思い出したのは……」

そこで一旦、言葉が区切られる。

「君との思い出と、自分の思い」

彼は記憶を失くしているんじゃない。思い出せなくなってるんだ。

私達は幼い頃からよく、一緒に遊んでいた。彼の記憶のほとんどは、私と一緒に過ごしていたもの。

私は誰よりも彼と一緒にいたから、彼の心に残っているんだと思う。

私との思い出が。

彼の…私に対する想いが……

## 哀・喜（前書き）

皆さん、お久しぶりで〜す

サブタイの意味は読んできると分かります。

それにしても、いつもの如く短いですね〜。

作者は『構想段階はもっと長かったんだよ。でもね、書いてると短くなるの。何で？』と、言っていました。

いや、聞かれても…ねえ……。

まあ、そんなくだらない話は置いといて、本編に行きましょ〜

## 哀・喜

パチパチパチ

彼が登場したら盛大な拍手が上がった。

彼は椅子に座ってピアノの蓋を開ける。拍手は止み、静かになる。空気が張り詰める。みんなの期待と、彼の不安によって、ピンと張られたピアノ線のように、それぞれの気持ちがピークに達した。彼の指が鍵盤の上を踊り始める。張り詰められた空気は徐々に緩み、心地よくなる。

それと同時に私は、とても悲しくなった。彼はもう、時の人。私の住んでる世界とはかけ離れた場所に行ってしまった。おそらく、もう彼は私の事を覚えていない。

音が止んだ。演奏がもう、終わったんだ。

パチパチパチ

さつきよりも、盛大な拍手が上がる。

切ない。できればもっと、聞きたかった。でも、それはできない。これ以上、彼の顔を、演奏を聞いてたら、別れづらくなる。また、聞きたくなる。会いに、来なくなる。

ダメ。早く帰ろう。せつかく決めたのに、ここに居たら意味がなくなっちゃう。

静かに、泣いてる事を気付かれないように外に出る。やっぱり、まだ夜は寒いな。雨が降ってたら、泣いてる事を誤魔化せるのに……。

会いたい。

「会いたいよお……」

涙が止まらない。これで最後って決めたのに…。

泣きながら、明日の朝にはチェックアウトするホテルに入る。人が見てる。でも、気にならない。

だって、目の前には…………。

「久しぶり。って、何で泣いてるんだ!？」

彼が居たから。

彼は私が泣いている事に驚いて駆け寄ってきた。

「どうしたんだ?何かあったのか?」

「バカ……バカア……」

彼の胸に顔を埋める。

嬉しい。覚えててくれた事が、もう一度、彼に会う事ができたのが。

彼は困惑してる。そんな彼が面白くて、可愛くて……。

やっぱり、お別れなんてできないな。もし、彼が私の事を好きじゃないとしても、構わない。友達でもいいから、一緒に居たい。

彼から離れて、今できる最高の笑顔で…。

「教えない!」

今はこの、一時の幸せを味わいたいから。

## 哀・喜（後書き）

皆さんが言いたい事は大体分かりますよ。

これってハッピーエンドなの！？

まって、ねえ、これってハッピーエンド投稿用の短編集だよね？ど  
う考えても悲しくない！？

『最後はハッピーだろ？』

何で疑問系？！どう考えてもこれ、ハッピーでもバッドでもないア  
ンハッピーエンドってやつでしょ！！？

『うつさい…』

うつさいって何！？てか、なんで紙に書いたのが降ってくんの！？  
どっかで聞いているでしょ！！？

『長くなりそうだから終わります…』

ちょ、まて…！

## 嬉（前書き）

タイトルは思いつかなかったそうです。

漢字一字なのは、喜怒哀楽の喜を嬉に変えたそうです。

嬉

三年ぶりに彼を見た。

でも、彼は知らない女性と一緒に歩いていた。

気付かれないようにそっと、彼の側を通り過ぎる。だけど、急に後ろから手を掴まれた。

振り向いて手を掴んでる人を確認する。

「どこに行く気だ？<sup>みやび</sup>雅」

彼の顔を見つめる。まだ幼さが残る顔立ち。何で、私を引き止めたの。

「その子だれ？」

「ん、さっき話した……」

女性の問いに彼は私の腕を引っ張り、腕を肩に回して抱き寄せる。

「俺の好きな人」

「え……？」

彼の発言の意味が理解できない。いや、理解はできてる。だけど、信じられない。だって、彼は……。

「ああ！告白する前に転校しちゃった人」

え、どういう……話についていけない。だって彼は、私の告白に悪  
いって言ったじゃない。

「ああ。こいつから告白してきた時は焦ったよ。その場で返事するか、用意ができてからするか」  
「用意できてから？」

どういう事。何を用意できてからなの。

「それじゃ、邪魔するのもあれだから、私帰るね」  
「氣い使わせちまって悪いな」  
「いいよ。私のお願いも聞いてくれたし。じゃあね」

女性は帰っていった。  
話がどんどん分からなくなってく。

「ここじゃ話しづらいから、移動しようか」  
「うん……」

彼について行く。  
着いた場所は綺麗なマンション。ここに彼は住んでるみたい。

「ここで少し待っていてくれ」  
「わかった……」

彼は中に入っていた。少しして出てきた彼は、手に小さな箱を持っていた。

「一つ聞いてなかったな」  
「何？」  
「誰かと付き合ってるか？」  
「ううん。要一は？」  
「付き合ってるねえよ。お前にまだ、俺の思いを告げてねえから」

それって、もしかして……。  
鼓動が早くなる。顔が少し熱い。

「俺も好きだよ、雅」

小さな箱を差し出してきた。綺麗な水玉模様のピンクの包装紙に、赤い紐でラッピングされた箱。

彼の顔を見ると、頷いた。開けてみてって事だよな。

箱の中に入っていたのは、綺麗なネックレス。ハート型の穴が開いてて、それに合うサイズの小さなハート。穴の開いてるやつは、穴だけでなく、外もハート型。

「綺麗……」

光に当てると、淡いピンク色になるんだ。

「本当はプレゼントを用意してから告白したかったんだけど、先にお前が告白してくるもんだから計画が狂った」

「そ、それは……」

「引越す前に伝えたかったから。だろ？」

「うん」

学校を卒業するのと同時に告白したから、みんなは転校する事を知らなかった。卒業をしても遊ぶ事があるだろうけど、私は人と話すのがそこまで得意じゃなかったから。

「今でも、俺の事好きか？」

「うん！」

## 嬉（後書き）

恋愛モノ多いな。

まあ、特に触れることもないんで今回はこれで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7405r/>

---

HAPPY TRAIN

2011年4月15日02時10分発行